



先月末の全国紙に“海上自衛隊「省人化に活路」”の見出しで、“人の問題”を抱える海自の実情が紹介されていました。対中国・北朝鮮の警戒監視任務が増えている一方で少子化による隊員確保が困難な状況に鑑みて、監視に特化した哨戒艦の導入をはじめ、装備、運用、役割の特化等々、少人数で効率的に任務を遂行するため「省人化」に本腰を入れている海自部隊の現状を改めて認識した次第です。

このことは、「自衛隊諸業務に対する協力支援」を事業活動の重点に掲げる自衛隊OB団体として、「何を・どのように協力すればよいのか。何が自衛隊部隊にとって本当に協力になるのか」といった原点に立ち戻って考えることの必要性を示唆するものと受け取るべきと考えますが、皆さんいかがお考えでしょうか。
<支部長>

支部の活動概要

《4・5月活動実績》

- 4. 7(土) 千葉県護国神社春季例大祭奉仕作業
- 4.17(木) 千葉県隊友会通常総会(千葉市)
- 5.11(土) 支部総会行事(市内芳喜楼)
- 5.25(土) 5月(新年度)支部役員会(コミセン)
- 5.27(月) 旧海軍落下傘部隊慰霊祭(安房神社)

《6・7月活動予定》

- 6&7月 特定NPO 海・河川浄化運動協力(船形小)
- 7月上旬 21空群飛行幹部候補生100キロ行軍声援
- 7.24(水) 県隊友会前期支部長会議(千葉市民会館)
- 7.27(土) 7月支部役員会(コミセン)

令和元年度館山支部総会行事を終えて

5月11日(土) 市内芳喜楼

恒例の館空会との合同行事が、市内「芳喜楼」で盛会裡に行われました。

支部総会 千葉県隊友会安達孝昭新会長及び日向錦次郎新副会長、藤田幸生元隊友会相談役隣席のもと正会員27名が参加して行われ、令和元年度事業計画ほかの議案が原案どおり承認されました。

合同懇親会 海自第21航空群から小俣(おどら)群司令ほか各隊司令、各隊隊員代表計17名の参加を得て、総勢70余名が集い、群司令、県会長の挨拶に続き藤田顧問の乾杯の音頭で開宴、懇談に入りました。

懇親の場合は、太田館空会副会長の名司会により終始和やかな雰囲気の中で進められ、懇親会の風物詩になった各隊ごとのプレゼンテーションは、OB会員にとって部隊の実状を理解し、OBと現役隊員相互の意志疎通を深める上で、この上とない企画と言えます。
<支部長>

《支部として今年度特に重視すべき事項》
※支部運営基盤の整備(充足、充実、強化)
会務運営の中核として、(ある程度)専従的に会務の運営に携わり、推進のため奔走できる役員を選任
いかに立派な方針を掲げ、立派な計画を立てても、これを推進する「人・役員」がいなければ「お題目」に終ることは自明の理です。昨年度に引き続いてこれを最重視課題として努力する所存です。
<支部長>

《講話寸評》 榊志学経営代表 丸淳一氏
演題「歴史の真実・人の心は美しいか」
過去にも2度行われた丸先生の講話は、「(戦後の日本人が抱く)歴史認識」がコンセプトとして貫かれ、引用された憲法、自衛隊、尖閣・竹島、韓国統治等々、誤った歴史がこのままウヤムヤにされることのないよう歴史の真実追求のため一生懸命勉強しなければというモチベーションになるものでした。 <川村 記>

新入会員紹介

- 4月期 高田裕章会員(海、館空基) 仁科 颯(にしなはやて)会員(陸、34普連、板妻)
- 5月期 渡邊 正会員(海、21整補隊)
自衛隊での勤務を全うされ 隊友会への即日入会を歓迎致します。

総会議決権の行使について

令和元年度隊友会定時総会(6月25日)の各議案(5. 15号隊友掲載)について代理人(千葉県隊友会会長)に一任する場合は、同封の「議決権の代理行使書(ハガキ)」を6月12日までに投函して下さい。
<支部事務局>

寄稿「海上自衛官の戦闘服」そのルーツ・変遷を辿(たど)ると・・・

最近、館山基地で迷彩の施された戦闘服を着用する隊員が目立つようになりました。群司令も隊司令も、隊員全員が戦闘服を着用して勤務しているのです。かつて幹部の作業服が灰色から濃紺色に、曹士用が白から青色に変わりましたが、今では海上自衛官に貸与されている戦闘服、作業服は迷彩服に変わりました。戦闘時など相手から発見されにくい、相手を惑わし我が身を守る保護色というところから諸外国の例に習ったものと言えましょう。ここで戦闘服(軍服)の歴史を辿ってみることにします。

15世紀半ば、イングランドで王位争奪に端を発した貴族間の内乱は、ランカスター家が赤、ヨーク家が白いバラの徽章を胸に着けて戦ったことから「ばら戦争」と呼ばれ、この徽章が敵味方の識別が容易なことから、軍団の威容誇示の「紋章(エンブレム)」として、ヨーロッパ中に広まったと言われております。紋章とともに兵士の服装を単一の企画・デザインに揃えることで経済面(量産)でも有利ということから、兵士の軍服(戦闘服)が生まれました。特に傭兵団は、自分たちの働きをスポンサー(雇い主)にアピールするため華美なデザインを競い合い、中世のヨーロッパでは色とりどりの軍団が戦場に出現するようになりました。

やがて、兵器が「剣」主体から「銃砲」が出現したことにより、軍服にも変化が生まれました。中世後半に出現したマスケット銃と呼ばれる単発式の銃は、先込式で次弾を発射するのに1分ほどの時間が必要なため、指揮官が射程距離を誤って発射命令を出すなど、いたずらに味方の犠牲を強いる結果になりました。このため戦闘服は、敵の指揮官の判断を狂わせるために、背の高い帽子や大きな肩章、踵の高い靴を履かせて兵士を大きく見せるなどの欺瞞策が凝らされ、これにより、突撃の際に射程距離に届く前に敵に銃を発射させ、次弾が来る前に敵陣になだれ込むことが可能になったということです。

さらに大砲や連発式銃、機関銃の出現に伴い、相手から発見されにくいよう、派手な色彩やデザインを避け、さらに機敏な動作ができるよう機動性を考慮するなど戦闘服も時代とともに変化(進化)して行きました。

日露戦争の旅順攻略の際、日本軍(陸軍)は濃紺色の軍服に白袴(たすき)で突撃を繰り返したため、ロシア軍の大砲や最新式の機関銃に狙われ、おびたしい数の犠牲者を出しました。当時はまだ軍服(制服)がそのまま戦闘服だったようです。

日中戦争に入り、日露戦争の苦い経験を教訓として、戦闘服も中国大陸の黄土に対応したカーキ色に変わり、さらに鉄兜(鉄製のヘルメット)が装備されました。このように戦闘服は、兵器の進化やそれに伴う戦術戦法の変化に対応しているという工夫が凝らされているのです。現代では、電波、赤外線や人工衛星の画像が見張や偵察、監視、照準などに威力を発揮する時代です。

すでに実用化されたものもあると思いますが、これらに対応した精密な戦闘服・付属装備品が今後とも開発されていくことでしょう。

地球上に戦争が絶えないかぎり戦闘服が必要なことは人類の理想とは矛盾していますが、いつの日か戦闘服が必要なくなる時代が訪れることを願ってやみません。
<田辺孝次会員(海)>

「硫黄島の戦い」に至る 長く凄惨な道程(後)

(前号から続く) 壮絶を極めた海軍基地航空部隊の戦闘

サイパン失陥後、すでに空母の大半を失った艦載航空隊に代わって基地航空部隊が編成され、木更津に司令部を置く第7基地航空部隊(「7FGBJ」)は、硫黄島を拠点(前進基地)に広範な海空域に及ぶ対潜哨戒、索敵・迎撃任務に当たった。

茂原に司令部・本隊を置く第252航空隊(「252空」)は、7FGBの主力部隊として館山に本部を構えることになり、頻繁な館山～硫黄島間の行動を通じて館山に多くの情報をもたらしている。

断片的な「252空戦時日誌」及び「7FGB行動調査」から、当時の生々しい状況の数例を紹介する。

- ・迎撃、哨戒任務で硫黄島から連日のように出撃する飛行隊(数機～20数機単位)の「全機未帰還」のケースが次第に増えていった。
- ・館山基地から硫黄島に対する航空機・搭乗員等の補充が増える一方、輸送機で館山に後送される英霊や戦傷者が日増しに多くなり、館山基地では度々「海軍葬(現在の部隊葬)」が執り行われた。
- ・S19.11.24、館山を離陸し硫黄島に向かった252空 317戦闘飛行隊の零戦13機が、翌朝、サイパン島アスリート基地のB-29を銃撃(撃破)のため硫黄島から出撃、任務終了後(近くの基地へ)帰投する手筈であったが全機還ってくることはなかった。

硫黄島に対する集中・連続的な空と海からの攻撃

S19. 12に入り、硫黄島に対する米軍の攻撃が俄然、激しさを増した。サイパン島から発進したB-24爆撃機による75日間にわたる連日連夜の爆撃が行われた。地上の砲台や陣地に対する攻撃とともに、突貫作業で陣地の構築を行っている日本兵に休憩・睡眠をとらせない算段、「心理戦」であった。さらに硫黄島上陸の直前、3日間にわたって機動部隊艦艇による徹底的な艦砲射撃が行われた。これによって地上の砲台や構築物はほとんど姿を消し、いたるところ島形が変わったと言われる。

もう一つ、2月16・17日2日間にわたり機動部隊艦載機群(延べ千数百機)による関東一円の陸海軍航空基地に対する空爆が行われた。硫黄島上陸に際し日本軍機の反撃を抑えるための前哨戦として行われ、館山基地の空襲はこの一環として行われたものである。

米軍が硫黄島に上陸し、40日間に及んだ激戦には、このように8か月以上に及ぶ長く凄惨な序盤があったのである。「前哨戦」と呼ぶにはあまりにも長く凄惨な道程であった。この間の硫黄島をめぐる日本軍の戦死傷者の数は計り知れないものがあると思料される。

むすび

太平洋戦争中の悲惨な激戦はまだほかにもあった。この小さな島をめぐる攻防は、米軍にとっても戦闘史上かつて例のない、大きな労力と犠牲を払った戦いであり、両軍にとって日米戦の「天王山」と言うべきものであろう。「本土決戦の時間稼ぎ」とか「本土攻略の飛び石作戦のプロセス」というだけでは、今なおここに眠る英霊も浮かばれない。

抒情詩(前号冒頭で紹介)の最終章は、「歳月心無く去って還らず 幾万の精霊この処に眠る」と結ばれている。「時が過ぎ、幾万の英霊がこの島に眠っていることすら忘却のかあなたに投し去らん」とする世の無情を憂う詠者の念(おも)いが込められていると思う。

<自称地域史探索マニア その24(2/2)>